

## 大学図書館と学習支援・教育支援 —京都大学での実践を通じての考察—

私立大学図書館協会阪神地区協議会  
2011年度第2回定期総会・講演会  
(2012年2月20日, 桃山学院大学)

京都大学附属図書館研究開発室  
准教授 古賀 崇

tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp  
[http://researchmap.jp/T\\_Koga\\_Govinfo/](http://researchmap.jp/T_Koga_Govinfo/)

1

## 本日の内容

- はじめに:「京都大学附属図書館研究開発室」の概要と活動
- 京大での取り組み(1):ポケット・ゼミ「情報源を読み解く」
- 京大での取り組み(2):教員対象インタビューなどを通じての、学内でのニーズの把握
- まとめ:図書館として考えるべきことは何か

2

## はじめに:

「京都大学附属図書館研究開発室」  
の概要と活動

3

## 研究開発室 ウェブサイト



<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/rd/>

## 関連論文

- 拙稿「京都大学附属図書館研究開発室の活動について」『名古屋大学附属図書館研究年報』第9号, 2011, p. 13-20.  
<http://hdl.handle.net/2433/139495>

4

## 「研究開発室」のあらまし

- (1985年4月 前身の「調査研究室」設立)
- 1996年4月設立
- 2009年1月 初の専任教員(任期制)として古賀が着任
  
- 「情報リテラシー教育・講習研究会」(2009年4月～)
  - 現在、学内教員(古賀含め4名)と学内図書館・室(附属図書館と各部局(研究科・学部等)図書館・室)の担当で構成
  - 教員・職員の協働による研究開発の場

5

## 直面する課題と対処

- 「情報探索入門」
  - [http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/support/index.php?content\\_id=3](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/support/index.php?content_id=3)
  - 1998年度より実施→新たな展開は？
  - 図書館として孤立した授業になってしまっている(他の科目とのつながりが無い)、との指摘
- ↓
- 新たな授業アプローチの試み:「ポケット・ゼミ」
- 「他とのつながり」の模索:学内教員インタビューなどを通じて

6

## 「情報源を読み解く」

京大「ポケット・ゼミ」での試み

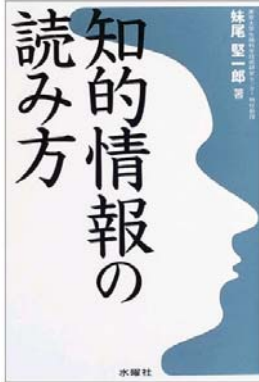
7

## 京大における「ポケット・ゼミ」 (ポケゼミ)とは

- 正式名称:「全学共通科目 新入生向け少人数セミナー」
- ポケゼミの位置づけ・ねらい:新入生に対し、京大としての最先端の研究成果などに触れさせる
  - 各科目で原則10名程度まで。主に前期開講
  - 半数程度(約1600名)の新入生が受講
- ↓
- 平成23年度ポケゼミ「情報源を読み解く」(古賀担当)
  - ねらい:情報源の「構造」や、各種情報(源)の読み方・活用法を理解する
    - 種類ごとの特徴、「時間の流れ」、研究過程とのかかわりなど

8

## 前提となる本(1)



- 妹尾堅一郎『知的情報の読み方』水曜社, 2004.
- 妹尾堅一郎『考える力をつけるための「読む」技術』ダイヤモンド社, 2002.
  - いずれも、情報源の構造・位置づけ・作られ方を意識した「読み方」を示す

9

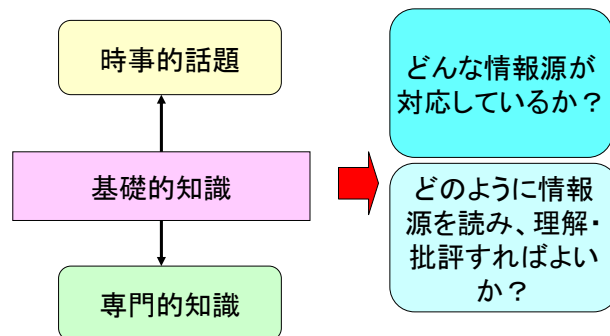
## 前提となる本(2)



- 小山田耕二・日置尋久・古賀崇・持元江津子『研究ベース学習』(コロナ社, 2011)
- 全5章+付録(授業の実例)
  - データの収集・分析、論文化、発表など
- 古賀は4章「学術文献の探索と評価」を執筆

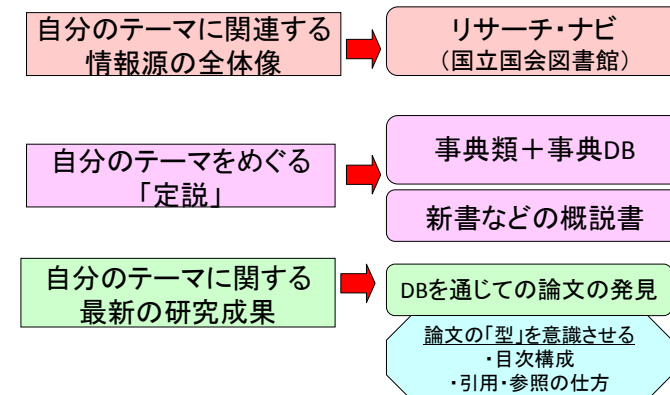
10

## 情報源の「構造」の大枠



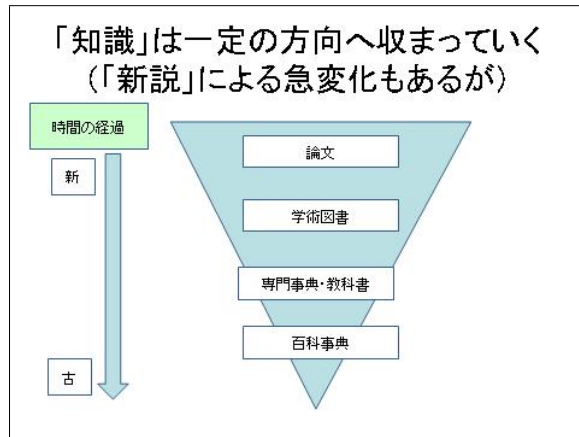
11

## ポケゼミの大まかな流れ



12

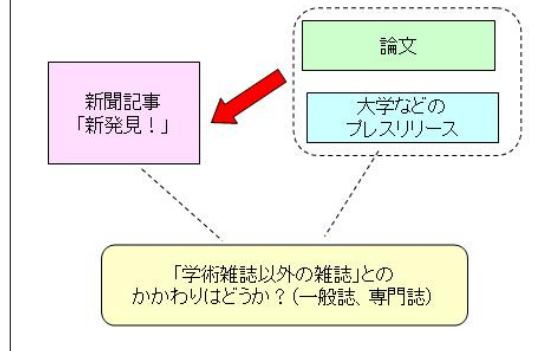
## 用いた図表の例(1)



13

## 用いた図表の例(2-1)

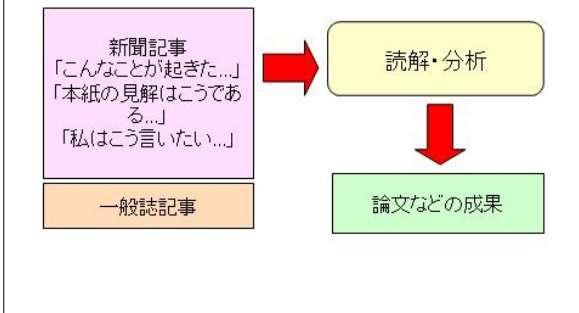
新聞記事と研究とのかかわり: パターン<1>



14

## 用いた図表の例(2-2)

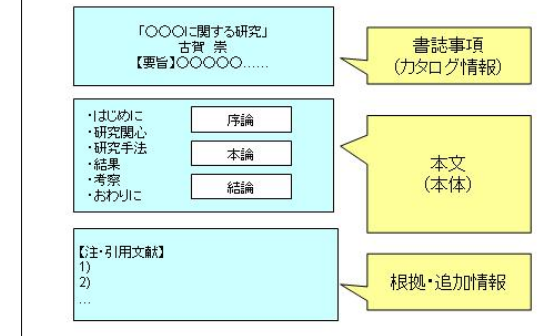
新聞記事と研究とのかかわり: パターン<2>



15

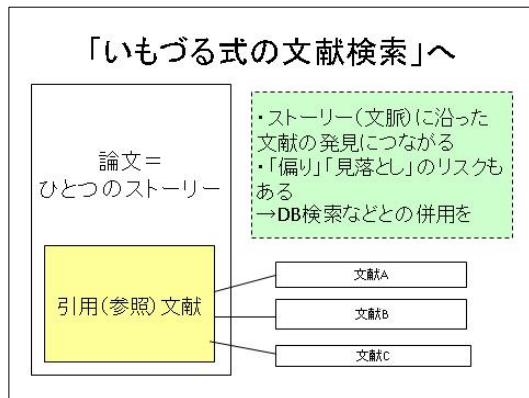
## 用いた図表の例(3-1)

論文の構造



16

## 用いた図表の例(3-2)



17

## 心がけたこと

- 情報・情報源を読むためのポイントの提示
  - 情報源の構造
  - 情報どうしのつながり
    - 例: “論文は引用(参照)文献から先に読むべし”
  - 時間軸
    - 「通説(教科書的知識)」と「新説(研究の最先端)」
    - 事象・概念のとらえ方の移り変わり
- さまざまな情報源に触れさせる
  - 例: OECD iLibrary(各種統計データの加工が可能)

18

## 効果と反省・課題

- 学生の研究上の関心・発想をうまく導けた可能性
  - 例: 認知科学
- 「アカデミック・ライティング」にも踏み込みたかったが叶わず
- 学生－教員の交流をどう進めるか
- 今回は少人数(10名)対象の授業→より多くの学生を対象としたものにどうすれば応用できるか
  - 「eラーニング」化は可能か?

19

## 情報リテラシー・学習/教育支援に 関する学内でのニーズの把握

20

## 実施した調査・インタビュー

- 2011年1月 学生対象の「予備調査」
  - 古賀が担当する科目の受講者に限定
    - ウェブアンケート+授業内での聞き取り
  - 1回生から修士課程院生まで
- 2012年12～1月 教員対象のインタビュー
  - 各学部の教員の関心や実践を聞き出す
    - 学部専門教育および大学院教育に携わる立場
    - 「全学共通教育」に携わる立場
    - 情報教育に携わる立場

21

## 教員のニーズの違い



卒論への準備、またレポートの「コピペ問題」などを考えると、早いうちから情報探索・表現(引用の仕方含め)のスキルは身につけるべき。



さまざまな情報源の活用法を教えるのは、むしろ専門的学習が本格化しはじめた頃(例えば3回生の夏前あたり)のほうが効果的ではないか。



理工系の場合、研究室単位での研究・教育(4回生以降)を視野に入れるべき。また、単なる「検索法の教示」よりも、論文執筆の手順や「研究のヒントをいかに得るか」に焦点を当てた企画を求める。

22

## 図書館にとってのPRの課題

- 講習会などについて、ウェブにお知らせを載せるだけでは不十分(受け身)
  - いかに「能動的なPR」に向かっていくか
  - どこをターゲットとするか: 教務掛、学生・院生組織、FD担当部門など
  - 理工系であれば研究室単位での働きかけへの考慮を

23

## 「情報教育」の枠組みで

- 3つないし4つの枠組みを考える必要
  - コンピュータ・リテラシー/ITリテラシー: 操作法などのHow To
  - 情報リテラシー: 情報の検索・分析・表現
  - メディア・リテラシー: 「批判的読解力」
  - 情報倫理・法制: 著作権、知的財産、個人情報保護、セキュリティ
- 情報教育を共通教育の一環として意識し体系化しているところ、そうでないところ...

24

## 蔵書(情報源)・環境のニーズ

- 「教員による研究用の図書」と「教育・学習に求められる図書」とのバランスをいかに確保するか
- 教科書・教材の電子化に図書館として対応できるか
- 「ラーニング・コモンズ」的環境を求める教員の声も
  - 討議を進め、オンライン情報源を活用でき、院生(TA)など人的サポートが得られる場

25

## まとめ

26

## 図書館として考えるべきこと(1)

- 「インプット」(情報の探索・収集)から「アウトプット」(レポート等の執筆)にどうつなげるか
  - 参考事例: 大阪大学附属図書館での取り組み( JLA図書館利用教育セミナー<2011.3, 京都>で紹介)
- 学内の他部局とのつながりをどう構築するか
  - 「大学教育開発センター」など、FD担当部局をまずターゲットとするのが効果的か
  - 大学によって、図書館としての戦略は異なるはず
    - 事例・ノウハウの共有を

27

## 図書館として考えるべきこと(2)

- 「教職協働」: FD・SDや、「大学ICT推進協議会」の取り組みなどを参考にできないか
- 学生に身近な図書館へ
  - 参照: 「学生協働まっぷ」(KU-librarians勉強会)  
<http://dl.dropbox.com/u/15665405/map/index.html>
- 研修に出て、実践報告を聞いても「自分のところでは無理...」とあきらめることなかれ!

28

## さらなる課題

- デジタル時代の「知」のあり方は？
  - 「信頼性のあるネット上の情報源」の構築に、大学・図書館はいかに貢献できるか
- 関連発表（資料は古賀のウェブサイトからアクセス可）
  - 「大学を取り巻く課題と大学図書館の役割」平成23年度大学図書館職員短期研修（京都会場），2011年10月4日，京都大学附属図書館。
  - 「「電子辞書と電子リソース」と教育・研究とのかかわり」第13回図書館総合展フォーラム「次世代電子図書館を探る：教育・研究の中の電子辞書と電子リソース」，2011年11月11日，パシフィコ横浜。